

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成27年9月28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職名・学年 博士課程5年

氏名 有井 晴香

助成の種類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	第19回国際エチオピア学会 the 19th International Conference of Ethiopian Stu	
発表題目	How Women Choose Their Schooling in Their Life course: The Case of Maale, Southwestern Ethiopia	
開催場所	ワルシャワ大学 (ポーランド、ワルシャワ市)	
渡航期間	平成27年 8月22日 ~ 平成27年 8月30日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円
	使用した助成金額	350,000 円
	返納すべき助成金額	円
	助成金の使途内訳	航空券代: 231,000円
		宿泊費: 60,000円
		学会参加費: 10,000円
国内交通費: 21,000円		
日当: 28,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 国際学会で発表することは大学院生にとって、経費負担が大変厳しいものと思います。今回のような助成金をいただけることで、大変有意義な経験をすることが可能になり、大変ありがたかったです。今後も助成が継続されることを強く望みます。	

平成 27 年度京都大学教育研究振興財団  
国際研究集会発表助成報告書

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
博士課程 5 年  
有井晴香

【参加学会の概要】

ポーランド・ワルシャワ大学で平成 27 年 8 月 24 日～28 日までの 5 日間開催された第 19 回国際エチオピア学会 (International Conference of Ethiopian Studies) に参加し、口頭発表をおこなった。本研究集会は 3 年ごとに開催される、世界各国のエチオピア研究者が成果を発表する歴史的にも著名で権威ある国際研究集会である。その目的は、エチオピア地域研究にたずさわる研究者、学生等が研究成果を発信するとともに、エチオピアの文化、社会、生態等の多様な側面に関する経験、知識、アイデアを交換することにある。本学会で設定されるパネルは考古学、文学、言語学、歴史、国際関係、法律・政治・社会、生態・環境、開発、音楽・映画など多岐にわたり、分野横断型の研究も多数みられる。本大会の全体のテーマとして *Diversity and Interconnections through Space and Time* と掲げられたように、実に多様なテーマ・分野に関して研究発表がおこなわれた。24 ヶ国から 200 人以上の参加者が集まった。

本学会への参加を通じて、同じ研究領域・関心をもつ研究者との交流だけでなく、調査地域を同じくする他分野の研究者とも新たに交流をもつことができ、単に人脈を広げるだけでなく、現地調査をするうえで有意義な情報交換をおこなうことができた。

【発表の概要】

私は *New challenges facing educators and education in Ethiopia* と題された教育課題のパネルセッションにて発表をおこなった。発表題目は *How Women Choose Their Schooling in Their Life course: The Case of Maale, Southwestern Ethiopia* (女性の就学選択とライフコース—エチオピア西南部マーレを事例に) である。私が参加したセッションでは他に 3 人のエチオピア人研究者が発表をおこなった。発表時間は 20 分、質疑応答の時間は 10 分もうけられた。まず、発表内容の要約は以下の通りである。

エチオピアの女子の就学問題に関する従来の議論においては、女子教育の社会的な重要性や、女子の就学状況をいかに改善し、就学におけるジェンダー平等を達成するかということが主に論じられてきた。しかし、個々の女性がどのような状況の下で就学することを選択しているのかということは検討されてこなかった。また、女子の中退や未就学を問題視し、それらを防止するための議論がなされる一方で、中退経験者や学齢期に就学しなかった人びとのその後の教育に関しては論じられてこなかった。本発表では、エチオピア西南部マーレの農村において、学齢期を超過しての就学あるいは復学を経験した 3 人の女性への聞き取りをもとにして、それぞれの女性が就学あるいは復学という選択に至る経緯を検討した。本発表を通して、現行の教育システムと、女性の就学に対する社会的承認と個人の状況的な意志がかみ合い、親密な間柄のなかで関係の調節がおこなわれたことによって、彼女たちの就学は可能となっていたことを

明らかにした。また、アフリカの農村社会において継続的な女子教育を達成するためには、固定的なライフサイクルを前提とした単線的な教育開発を考えるのではなく、多様な行動選択を含むライフコースも視野に入れることが重要であることを指摘した。

発表を通して、結婚や出産を経験した女性がいかにして就学を可能にできるのかという点と、個々の女性の人生にとって学校教育がどのような意味をもちうるのかという点に関して議論を深めることができた。

**【謝辞】**

本助成により、今回の国際会議に参加・発表し、世界各国の様々な分野の研究者の方々と交流を深め大いなる刺激を受けることができました。ここに厚く御礼申し上げます。